

上野彦馬とその時代

姫野順一

文久2（1862）年秋に開業した上野撮影局には、新来の多くの欧米人が撮影に訪れた。今回も「幕末明治期長崎来訪人物写真集」（長崎大附属図書館武蔵文庫）と「上野彦馬撮影局―開業初期アルバム」（江崎鑑甲店蔵）の2冊のアルバムから紹介する。

写真①は、日本初の近代西洋式病院「小島養生所」で2代目教頭を務めたオランダ人アントニウス・ポードインである。

初代教頭のポンペ・ファン・メーデルフォルトと同じくユトレヒト陸軍医学校を卒業。出島のネーデルランド貿易商社の首席代表を務めていた弟アルベルトの仲介により、文久2年から養生所のお雇い外国人「医師」となった。出島に住んで小島の養生所・医学所に通い、新たに眼科手術室を設けた。また医学の基礎として物理・化学を重視し「分析窮理所」を創設した。この時、養生所も名が「精得館」と改まった。

慶応2（1866）年ごろ撮影のこの写真は、彦馬とポードインの交流を示す重要な



①アントニウス・ポードイン（江崎鑑甲店蔵）

10 撮影局訪れた欧米人

証拠である。欧米の上流階級が権威と護身のために携帯したステッキを持つ。2人は間違いない、この時写真の化学について談笑したはずである。

ポードイン兄弟は2人とも写真撮影に取り組んだ。彼らが残した膨大な古写真群は、現在長崎大附属図書館のポードイン・コレクションとなり、国の登録文化財となっている。

写真②③は別々のアルバムに収載されているが、実は同じ人物が構図を変えて撮影されている。ロシア海軍士官の集合写真で、台柱、棚、壁の形状から慶応元（1865）66年ごろの撮影である。

「外国御用留」（長崎歴史文化博物館蔵）によれば、慶応元年夏にロシアの軍艦・ワリヤグ号とボガデル号が入港し、秋にはワリヤグ号がアメリカ号と交代。慶応2年春からはアスコリート号、ソフボリ号とイズムルド号が入港し



②ロシア海軍士官たち（江崎鑑甲店蔵）

階級や習俗 写し出す

乗せ、酔っぱらった海軍士官の撮影で、彦馬は目線をちらす指示が出せなかったようである。

当時上陸して宿泊できるのは士官までであり、水兵（マタロス）は日帰りのマタロス休息所を使い、夜は船で寝泊まりした。稲佐の止宿所では上官のために若い女性が給仕や召し使いとして雇われ、契約による妻となる場合もあった。遊郭の丸山と寄合からは稲佐行き遊女たちがいた。中央の女性の顔が削られているのは「中央で写真に撮られると早死にする」という迷信からである。私服の男性は、軍艦諸色買い込み船を手配するロシア人商人ではないかと思われる。

写真⑤は同じ頃、彦馬スタジオの屋外で撮影された、アメリカ海軍士官と通訳である。例によって目線はバラバラ。画像からは幾つかのメッセージが読み取れる。軍服は3人で、袖に線が入るのはキャプテンか。アメリカ北軍の制服はブルーだった。和服の2人ははかまと羽織の正装で、通訳と思われる。右側の人物は領事館員のように思われる。上位者はやはりステッキを手にはしている。

写真④は女性同伴、酒瓶持参のロシア海軍士官である。この写真では全員がカメラを向いている。女性たちを膝に



③ロシア海軍士官たち（長崎大附属図書館蔵）

写真⑥は居留地の商人たちと共に子どもが写されている。安政6（1859）年の長崎開港以後、外国人女性や子どももの入国も可能となった。居留地の住民は記念のために彦馬スタジオで撮影を求めた。しかし、書き込みのない写真の人名を確認するのは困難である。今後の解明を待ちたい。

（長崎外国語大学長）
「偶数月の第3日曜付サンデーぶんかに掲載」



④ロシア海軍士官たち（長崎大附属図書館蔵）



⑤アメリカ海軍士官と通訳ら（長崎大附属図書館蔵）



⑥居留地商人と子ども（長崎大附属図書館蔵）